

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈いじめ〉との距離：村上春樹「沈黙」論
Author(s)	秦, 光平
Citation	近代文学試論, 60 : 157 - 168
Issue Date	2022-12-25
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/54890">10.15027/54890</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/54890">https://doi.org/10.15027/54890</a>
Right	
Relation	



# 〈いじめ〉との距離

— 村上春樹「沈黙」論 —

秦 光 平

はじめに

一九八〇年代中盤、日本において〈いじめ〉が社会問題化した。それ以来、〈いじめ〉は数多の文学作品の中に描かれてきたが、その〈いじめ〉表象史の本格的な研究は未だ十分に為されていない。〈いじめ〉概念が日本社会に浸透していく過程に文学はいかに関わっていたのか。そのことを明らかにするためには、〈いじめ〉表象を实践した作品群への読解を積み重ねていく必要がある。本稿では、その作業の一環として村上春樹の短編小説「沈黙」<sup>①</sup>を取り上げ、分析評価を行なっていく。

本作は一九九一年に発表後、村上自身の作品集のほか、中高生を讀者に想定した『集団読書テキスト』や『はじめての文学』の一冊として刊行された経緯もあり、教育問題、とくに〈いじめ〉の文脈に即して読まれることが多い。作者の村上自身も〈故のないいじめ〉<sup>②</sup>にあつて、孤立してじっとそれに耐える男の子の姿が描かれている。〈同じような立場に置かれたことのある（そして今も置かれている）人々の心の支えに少しでもなってくれたら、僕としてはとても嬉しい〉<sup>③</sup>等と述べ、学校空間をまさに生きている人々の意識へと本作を接続してい

る。

現在までに本作を〈いじめ〉の観点からもつとも詳しく論じたものとしては、長谷川達哉による論考が挙げられよう。同論にて長谷川は（注：大沢の体験は）きわめて八〇年代的な社会問題としての「いじめ」といくつもの共通項を持つものである」と、同時代の〈いじめ〉問題と本作との共通性を論じている。しかしながら、本作を改めて読んでみると、作中に〈いじめ〉の名詞は一度も用いられていない（動詞の用法「いじめられる」が一度、登場するのみ）。本作を〈いじめ〉の文脈にて読めることは確かであるとしても、実際には〈いじめ〉の語によって言い表される問題系から微妙に距離を取っているとも考えられるのである。

このことをふまえ、本稿では〈いじめ〉を巡り交わされてきた言葉のあり方に関する研究Ⅱ〈いじめ言説〉研究の成果を積極的に参照し、その相違点をも明らかにする。そうして本作を読み替えていくことにより、特に〈いじめ〉の観点から見た本作の意義を再考していきたい。<sup>⑤</sup>

## 一 大沢の被害性

「沈黙」の梗概は以下の通りである。

「僕」は空港の待ち時間、これまで何度か仕事を共にしてきた「大沢」に「今までに人を殴ったことはありませんか」と訊ねてみた。温厚な大沢が中学以来、二十年以上もボクシングを続けていることを意外に思ったのだ。「二度だけある」と答えた大沢は、中学・高校の頃に経験した「危機」について語りはじめる。

大沢は中学生当時、同級生の「青木」に悪い噂を流布され、憤って彼を殴ってしまう。青木とふたたび同じクラスになった高校三年生時、受験戦争に殺伐とする中、同級生の「松本」が自殺する事件が起きる。

大沢は教師に呼び出され、ボクシング経験のみを根拠に嫌疑をかけられてしまう。その目を境に大沢は教室で何をしても無視されるようになり、精神的に危うい状況まで追いやられるが、自身への嫌疑を吹聴した張本人が青木であると悟っていた大沢は、電車で彼と鉢合わせたとき「なぜかほんとうにどうでもよくなってしまう」。大沢は残りの日数を高校に通い、卒業、進学を果たす。

しかし一見、立ち直ったかに思われた大沢は、その経験による傷を語る。大沢は青木そのひと以上に青木のような人間の発言を鵜呑みにする無批判な人々こそが恐ろしく、今もなお悪夢に悩まされているのだという。話し終えた大沢は「ビールを飲みませんか」と「僕」を誘う。そのころには「僕」もまたビールを飲みたいような気分になっていたのだった。

以上のように梗概をまとめるならば、本作において「大沢・被害者／青木・加害者」の構図は疑うべくもないように思われよう。しかし先行研究では、その自明性は相対化されてきている。本節では、特に

大沢の被害性がいかにして相対化されているのか確認していきたい。

大沢の回想は〈これまでに喧嘩をして誰かを殴ったことはありませんか〉(二八四頁)と訊ねた「僕」に答える形で語り起こされる。その語りは総じて、自身が集団であることよりも個人であることを好む人間だと示していくものと捉えることができる。大沢の語りは(彼(注：大沢)がボクシングに引かれたいちばんの理由はそれが基本的に寡黙なスポーツであるからだだった。またきわめて個人的なスポーツであるからだだった)(二八八頁)との自己認識とともに始まっていく。

大沢にとって中学校で出会った青木は(どうしてそんなに嫌いなのか、自分でもよく理解できなかったが、でも一目見たときからその男のことがいやでいやでしかたなかった)(二九〇頁)相手であった。大沢の語りにおいて青木は集団の空気を司り、世論を支配することによって才覚を誇示していく人物として浮上されていくが、その嫌悪感はずもって、個人であることを好む自身との差異を起点に語られる。大沢は当時の自意識(傲慢するわけではありませんけれど、僕はその頃から僕自身の世界というものを持っていました。(中略)そしてそういう無言の自負心のようなものが青木を刺激したんじゃないかと思うんです)(二九四頁)を語り、自身と青木の資質の違いこそが青木との決別の原因だったのだと因果づけていく。

この点について岡田豊は、学校集団から距離を取ることを大沢が自ら選択している点を重視し、〈大沢を一方的に被害者と決めつけることはやはり避けたほうがよい〉との認識を引き出している。

ボクシングジムは当時の大沢にとって唯一の安らぎの場である

と同時に、学校での級友との関係の疎遠を推し進める要素も持っている。もちろん、「青木の言うことを鵜呑みにした連中」に弁明しても意味がないと言っているが、それ以前に級友との関係を自ら絶っていることを考えれば、大沢のみを被害者と見ることは賛成しがたい。それ以前にも、沈黙を強いられる事態を生んだ原因の一端が大沢にもあったとしたら、「僕自身の世界」を持つていることを鼻にかけ、人付き合いが悪く、黙して語らない人間だったことが、皮肉にも集団からの沈黙として跳ね返ってきたという面さえある。このように、関係の疎遠と沈黙とをセットにした形で、大沢の言説の相対化が可能になっているのである。<sup>7)</sup>

着目されているのは、当時の大沢の言動と、その言動に対する現在の大沢の意識である。「僕自身の世界」を持つていることを鼻にかけ、人付き合いが悪く、黙して語らない人間だったこと」が「沈黙を強いられる事態を生んだ原因の一端」に位置づけられ、その因果関係に無自覚な現在の大沢が批判的に捉えられていくのだ。<sup>8)</sup>このように本作における大沢の被害性は今日、限りなく希釈されてきていると考えてよい。大沢はいまや自身の主張する被害者の地位からは半ば陥落し、その語りの端々から自身の側の落ち度を審問される席へと追いやられてしまっているのである。

なるほど、そのような把握は、本作において大沢の被害経験が過去から現在に至るまで連続して語られている以上、読解上は妥当な論理を有していよう。しかし、いったん観点を〈いじめ〉の側に移してみるとき、それが典型的な「いじめられる側にも問題がある」式の被害

者有責論と同型を為してしまっていることに注意しておかなくてはならない。「いじめられる側にも問題がある」の物言いは質的に異なる事象に原因／結果の因果関係を導入することでしか成立しないものであり、〈いじめ〉を考える上で倫理的のみならず論理的な錯誤をも孕むものである。大沢が教室の大勢に馴染むことを拒絶しているからといって〈何かどうしても必要な用があつて話しかけても返事は戻ってきません〉(二〇八頁)〈何かの競技をしても、僕は事実上どのチームにも入れませんでした。誰も僕とペアを組んではくれませんでした。そして教師は一度も孤立している僕を助けようともしてくれませんでした〉(二〇九頁)と語られるような状況に陥つたことを大沢個人の責に帰す論理が成立すべきではない。

いや、筆者はだからといって先行研究のすべてを斬り棄てたいわけではない。提起したいのはその先を考える必要性である。いま本作をめぐって生じているのは、テキストの記述を追い、意味づけていく読解行為が、〈いじめ〉を論ずる際に強く忌避されてきたような〈いじめ〉把握に行き着いてしまう事態であると捉えることができる。この点から、本作に社会問題化以降の〈いじめ〉言説とは異なつた方向性の思想が備わっていることも推測されよう。〈いじめ〉の文脈にて読まれているはずの本作をめぐるこのような事態の生じてしまう事情について、単に登場人物レベルでの批判を超え、より思考が深められなくてはならないと考えるのである。

そのためにはまず本作における大沢という人物のスタンスをより正確に把握していく必要があるだろう。大沢は自身の被害経験を語る際、どのような姿勢を取っていると考えればよいのか。次節にて、そ

の被害経験を考える際にもっとも重要と思われる記述を再考してみたい。それは、同級生の「松本」という人物の自殺に対する発言である。

## 二 大沢と松本、〈いじめ言説〉

前節で見たように、大沢は個人であることを好む人物と言える。しかし大沢は高校三年生の頃、個人であることを自身の選択としてではなく、属する共同体からの強制として生きなくてはならない状況に追いやられる。大沢自身「危機」(二二頁)と表現するその状況こそが大沢の〈いじめ〉体験と言えようが、大沢は〈いじめ〉被害にまつわる事象を、まずは他者の身に起きた出来事として経験することとなる。それが本節にて解釈を試みていく松本の自殺をめぐる騒動である。

松本の死を受けて教室は(しんと)して、誰もひとことも口をき(二〇三頁) こうとしない殺伐とした雰囲気になるが、その中であつて大沢はひとり次のような感情を抱いていたことを語る。

僕はそんなことはたいして気にはしませんでした。死んだ級友のことは気の毒だと思いました。何もそんなひどい死に方をすることはないのです。学校が嫌なら、学校になんて来なければいいだけの話です。それにあと半年もすれば嫌でも学校を出ていかなくてはならないんです。なのにどうしてわざわざ死ななくてはいけないんですか。僕にはよく理解できませんでした。たぶんノイローゼみたいなのだったんだろうと僕は思いました。明けても

暮れても受験の話しか出ないんですから、頭がおかしくなる人間が一人くらい出てきたとしても、とくに不思議はありません。(二〇三―二〇四頁)

〈ノイローゼ〉<sup>10)</sup> 〈半年〉<sup>11)</sup> といった語彙を用いていることから、ここで現在の松本が松本と当時の自分を重ね合わせて語っているのは明らかである。論点となつているのは、このように松本と自身の類似性を意識的に語っているにも拘らず、そして「危機」を経て大沢が後に〈まわりの人々が受けている傷や苦痛のようなものに対して、人並み以上に敏感にな〉(二二五頁) ったと語っているにも拘らず、自殺した松本に対する当時の〈どうしてわざわざ死ななくてはいけませんか。僕にはよく理解できませんでした〉という感情をいま、現在に至つても、注釈なしに発言している点である。この発言意図を大沢が明確に述べた箇所は本文中に存在しないため、この発言の背景をいかに読み込むかが、大沢への人物評価における分水嶺となつている。実際に先行研究では、この発言は一様に冷淡と捉えられ、大沢へのマイナス評価に拍車をかけてきた。<sup>12)</sup>

大沢による〈学校が嫌なら、学校になんて来なければいいだけの話です〉という発言は、不登校の選択肢自体をもつことができなかった事情に配慮していない点で全肯定はやはり難しい。しかし本節では、この発言への注釈を現在の松本が〈あえて行なわなかったことの必然性を考えてみたい。着目したいのは、本作において当該の大沢による発言が別の人物による松本への発言に連なる形で書き込まれていることである。それは教師の口から大沢への嫌疑として次のように発せ

られるものだ。

松本は学校でしょっちゅう誰かに殴られていたらしいんだよ、と教師はむずかしい顔をして言いました。顔やからだにあざをつけて帰ってくるのがよくあったんだ。お母さんがそう言ってるんだ。学校で、この学校で、誰かに殴られて、小遣い金を巻き上げられていたんだよ。でも松本はその名前をお母さんには言わなかった。そんなことをしたらもつと殴られてもつといじめられると思っただろうな。それであいつは思いあまって自殺したんだ。

かわいそうにな、誰にも相談できなかったんだよ。(傍点原文、二〇五頁)

高校三年生当時「危機」が発生した契機には、大沢の認識によれば青木により吹聴された自身への嫌疑があった。引用箇所の教師の発言は、大沢に対する集団的な罪着せのまさに根拠となったものであるが、その内実を検討すると、社会問題化以降の〈いじめ言説〉にきわめて近似した特徴が見出されるのである。

引用部から読み取れるのは、松本はいじめられたから自殺した、という因果関係を教師がいつさい疑っていないことである。別の箇所に松本の死については〈遺書らしきものがあとに残されていました〉がそこにはただひとつ、もう学校には行きたくないを書いてあっただけでした。どうして学校に行きたくないのかかそういう細かい理由は何も書いてありませんでした。少なくともそういう話でした(二〇二―二〇三頁)との記述があり、正確を期すならば、松本が真実いじ

められたから自殺したのかどうかは「わからない」と見なすべきである。つまり、ここで語られる松本の自殺の動機には教師による解釈が施されているのだ。では、教師たちが介在させた解釈——〈いじめ〉と自殺とを結びつける因果律とは何であったか。

そもそも〈いじめ〉とは、一九八六年の「中野富士見中学いじめ自殺事件」(遺書に〈いじめ〉が理由であると明記されていた)を契機に構築された概念である。社会問題化によりそれまで軽んじられていた行動群が死を誘発する暴力であると認知されたのである。〈いじめ〉の問題化が不可視の暴力を顕在化させる効能を有していたのは疑うべくもなく、その功績はいくら強調しても過ぎることはない。しかし一方で、〈いじめ〉から死への因果関係が自明化し扇動的に〈いじめ〉が語られていくにつれ、その問題化は少なからぬ副作用をも生んでいた。〈いじめ〉の言説研究に早期から取り組んできた伊藤茂樹によると、そのマイナス効果は被害者の主体性に関わる問題として次のように提起される。

以上のような事情から見出せるのは、「いじめ自殺」をした者の主体性が剥奪されていることである。つまり「いじめ自殺」をした者は、ひどいいじめを受けていたのだから「死んで当然」だし、そのいじめは最大級のものであったはずだ、と一方的に決めつけられるのである。しかし、自殺をした者の精神世界においてこれ以外のプロセスが生じていた可能性はいくらでもある。(中略)そして、そのプロセスにおいては「いじめられていたから自殺した」という単純な図式に収まらない様々なことが起こっている可能



性が高い。にもかかわらず、きわめて単純に「いじめられたから自殺した」と「決めつける」ことは、自殺した者一人一人の主体性を極小化し、ひいては剥奪しているとすら言わざるを得ない。<sup>13</sup>

伊藤が問題視するのは、〈いじめ〉と死との結びつきが自明化するにつれ〈いじめ被害者〉なる存在への理解が単純化していったことである。<sup>14</sup> 極言すれば、不可視の暴力を問題化するために提起された「〈いじめ〉は人を死に追いやるほどの暴力である」との認識が、「〈いじめ〉と死を結び付けることにより被害者を『かわいそうな存在』の枠に押し込む」という別種の構造的暴力へと転化してしまったのである。そして、そのような流れと連動して社会的にイメージされる〈いじめ被害者〉像が固定化していき、現実の事情から乖離した観念的な言説のみが行き交う場が醸成されていった。<sup>15</sup>

こうした社会問題化以降の言説状況を鑑みるに、教師が松本の死に施した〈そんなことをしたらもつと殴られてもつといじめられると思っただろうな。それであいつは思いあまって自殺したんだ〉という解釈は、まさに典型的な〈いじめ言説〉と同様の問題を孕んでいる。教師は松本の自殺を〈いじめ〉との因果関係に落とし込むことにより、その出来事を専ら生者たちにとって安易に了解可能な範疇へと矮小化してしまっている。〈かわいそうにな〉の憐憫とともに大沢への罪着せの形を取った代弁にはそのような危険性が隠れていたことを認識しておくべきであろう。

そのように考えるならば、当該の教師による言葉に大沢の〈どうし

てわざわざ死ななくてはいけないんですか。僕にはよく理解できませんでした〉の発言が併置されることにより、大沢自身や松本に、述べたような単純な〈いじめ〉被害者理解を適用することが難しくなっている点は重要であろう。大沢の発言には、〈いじめ〉被害を受けた人間の個別性を集団的に安易な同情を寄せる大衆に明け渡すことを拒絶する切実さを読み込めるのだ。実際、「はじめに」でも触れた〈いじめ〉の語句が唯一、動詞の用法として登場するのも当該の教師の言葉を再現する箇所である。こうした点より、大沢の語り全体を〈いじめ言説〉の典型に距離を置こうとしているものと意義づけることが可能であろう。<sup>16</sup> 〈いじめ〉にまつわる問題系を扱っていながら、その被害経験を語る人物自身によって〈いじめ言説〉の典型が避けられていく点に本作の特異性がある。

以上、本節では大沢の語りに対し、その被害経験にとって切実な意義を見出せることを示してきた。その意義は、大沢の被害性をいたずらに相対化する読解のみでは取り逃してしまうものである。<sup>17</sup> その上でやはり考えなくてはならないのが、大沢の語りに少なからず存する受け入れ難さについてである。次節にてその問題を、大沢の語りが「僕」による聞き書きの内に位置づけられる作品構造にも着目しつつ考えていきたい。

### 三 大沢と「僕」、読者

高校三年生の時に経験した「危機」の中で、大沢は〈半年間、なんとかその沈黙に耐えればいいのです。でも自分が六カ月もつかどうか

自信がありませんでした」(二二二頁)と語られるほどの精神状態まで追いつめられる。その状態から大沢が脱する契機となったのは、ある朝、電車で青木と乗り合わせたことであつた。そのとき大沢は、青木には「深みもなければ、深みを知る心も」(二二三頁)ないことに思い至り、「個」としての自分のあり方に対する誇りを取り戻す。その際の心理状態は、大沢自身によって「僕はそのまま五カ月間我慢しました。誰ともひとことも口をききませんでした。自分はまちがっていないんだ、みんながまちがっているんだ、と自分に言い聞かせつけました。毎日胸を張って学校に行き、胸を張って学校から帰ってきました」(二二四―二二五頁)と語られる。こうして、自身の「個」としての尊厳を保つことは、単なる嗜好やライフスタイルを超え、生きていくために必要不可欠な思想として大沢の中に根づくこととなつたのである。

それは、この体験を語つた直後に「ある日突然、僕の言うことを、あるいはあなたの言うことを、誰一人として信じてくれなくなるかもしれない。そういうことは突然起こるんです。何の前ぶれもなく出しぬけにやってくるんです。僕はいつもそのことを考えています」(二一六頁)と、「個」としてのありようを脅かす大衆への恐怖心を語つてゐることからも明らかであろう。「危機」を経て、いま現在に至つても持続する傷を生き延びていくために、大沢にとって「個」としての誇りは必要不可欠なのである。

こうした思想の獲得を経て、大沢は「青木のような人間の言いぶんを無批判に受け入れて、うのみにする」(「顔」というものを持たない)、まさに「個」としてのあり方を認めない人々の存在こそが「本当に怖い」のだと語るに至る(二二八頁)。本作にて最終的に語られる大沢の

このような社会認識を、いかに捉えるべきであろうか。

その検討のため、ふたたび大沢の語りの起源に立ち返りたい。前々節にて見たように、大沢の語りは「僕」による質問へこれまでに喧嘩をして誰かを殴つたことがありますか」(二二四頁)への回答として始まつていた。既に多く指摘されていることではあるが、「僕」によるこの質問自体、ボクシング経験者への無根拠なステレオタイプを内面化したものである点で、大沢の拒絶するような暴力性を孕むものであつた。<sup>18)</sup>つまり本作は、「僕」による質問を起点として、自分もまた「顔を持たない人々」へと墮する危険性を抱えているのではないか、という問いを終始、発しつづけているのである。本作には、「僕」による聞き書きの中で、根拠のない言説を鵜呑みにすることへの批判意識が複数の位相にて変奏されているのだ。

そのことをふまえると、大沢の語り自体が一種の受け入れ難さを孕んでいる可能性が浮上してくる。大沢は青木を「こんな奴は殴られたつてしかたあるまいと思ひました。この男は害虫のような人間なのです」(二九七頁)と苛烈に罵倒している。大沢の有する被害感覚の切実さは前節にて見た通りであるが、大沢が自身への加害主体が青木であると断ずる際に「どうしてそれがわかつたのか、見当もつきません。でもとにかく彼はそれを知つたのです」(二〇六頁)と直感に頼つた推測しか為すことができている以上、青木という人物が大沢の言う通りの行動を取つていたのかどうか、聞き手の立場から検証することは不可能である。<sup>19)</sup>つまり大沢は、自身の被害感覚を言語化することには成功していても、加害主体を特定・告発することには失敗している。こうした点から、大沢の語り自体が、自身の忌避するような根拠のな



い言説としての一面を含み込んでしまっているとも考えられるのだ。

こうした側面を、大沢の青木理解にある欠陥が招いた事態と捉え、本作へのマイナス評価に繋げることも可能であろう。しかしながら、より重要なのは、特に青木に関する大沢の語りによってこうした決定不可能性が含まれていることにより、聞き手に対して発せられることとなる問いの存在である。すなわち、聞き手が大沢の被害感覚を感じ取り同調しようとすることもまた、〈青木のような人間の言いぶんを無批判に受け入れて、うのみにする〉行為として大沢自身によって拒絶されているのではないか、という問いが喚起されることとなるのだ。

実際、本作を離れ〈いじめ〉一般に関する論考を紐解くと、〈いじめ〉において加害主体を特定することの困難について次のような見解も示されているのである。

いじめとは例えば殴るとか蹴るとか物を隠すといった個々の行為を指す概念ではなく、それらを含む一連の行為が特定の関係性の中で（例えばクラスの中で「浮いている」者に対して、クラスを中心にいるグループの者によって）、あるいは特定の文脈の中で（例えば、何か失敗をして集団全体に迷惑をかけた者に対して、その尻拭いをした者たちによって）行われた場合に、それらの行為がいじめを構成している、と判断することが可能になるのである。（中略）しかし、そうした認識を共有しない第三者から問われたり確認されると、その認識はしばしばあやふやで脆弱なものとなる。（中略）「ノリ」でやっていた、などと形容されるこうした

主体の見えにくさや希薄さと、責任の主体たる個人を確定しよう

とする作業は、きわめて相性が悪いと言わざるを得ない。

このように、いじめの主体Ⅱ加害者を同定するのは容易ではない。（中略）それは名指しされそうになった者が責任を回避しようとするからだけではなく、いじめという現象の本質にも由来するのである。<sup>21)</sup>

重大な被害性が確かに生じているにも拘らず、その加害主体を端的に問うことはきわめて困難であるということ——前節にて見たように大沢のもつ被害感覚は確かなものであり、大沢の被害性をいたずらに希釈する読みではその切実さを取り逃してしまふ（加えて、その読解が「いじめられる側にも問題がある」言説の再生産になつてしまいかねないことの問題も前々節に示した）。一方、本節にて見てきたように、大沢の語りが「僕」の聞き書きに埋め込まれるとともに、その信憑性は希薄化していく。しかしながら、大沢が突き当たっているような加害／被害の迷宮は、本作自体の陥穽であるとともに〈いじめ〉問題一般のリアリティでもある。ならば、大沢の語りにも存する決定不可能性への疑義は、〈いじめ被害者〉としての立場を疑うため大沢に対して向けられるべきではなく、〈いじめ被害者〉なる存在に相対することの困難を問うため読者を含めた聞き手に対して差し向けられるべきであると、そのように考えることはできないだろうか。大沢の言説を相対化し得る記述を話し手（大沢）の落ち度と見なすのではなく、聞き手（僕）、読者）の姿勢を試すものとして捉え直していくのだ。

そのような可能性を想定するとき、最終場面に示される「僕」と大沢のやりとりは示唆的である。

僕はそのまま続きを待っていたのだけれど、話はそこで終わった。大沢さんはテーブルの上で両手を組んで、ただじつと黙っていた。

「どうです、まだ時間は早いけれど、ビールでも飲みませんか」と少しあとで彼は言った。飲みましょう、と僕は言った。たしかにビールが飲みたいような気分だった。(二一九頁)

事態の一切が解決されたわけもなく、いま現在も持続する苦しみを告白する大沢の語りは、まさにビールとともに飲み干してしまいたいほどに苦々しいものである。その苦々しさは、大沢の語りを聞く者の一人として、読者もまた共にせざるを得ないものである。そして本作を前に読者は、あなたは本当に被害者と、言えるのか、と暴力的に審判してしまいたくなる自己を試され、わたしはいかに被害者を理解し得るのか、と問い返される立場に身を置かれることとなるのだ。

### おわりに

以上、〈いじめ〉との関連に着目して村上春樹『沈黙』を読んできた。従来、登場人物レベルでの批判に収束してしまいがちであった本作を「被害者」なる存在に相対する者の側を問い返すものと捉え直した点で、本稿は本作をめぐる議論を一步、先に進めたと言える。また、大沢の語りが〈いじめ言説〉の典型から距離を取っている可能性に言及した点、および大沢の語りの決定不可能性を〈いじめ〉問題一般の困

難を反映したリアリティの表現であるとの評価を提示した点で、〈いじめ〉の文脈に即した本作への評価にもまた新たな観点を付け加えることができたはずである。

作者本人も〈自分がそのときに感じた心情を少しでもリアルに、物語というかたちに換えてみたかった〉<sup>(2)</sup>と執筆動機を語っているように、本作には〈いじめ〉問題のリアリティを反映した複雑性が見出せる。しかし、そのリアリティは〈いじめ〉の捉え方をめぐる陥穽と表裏のものでもあった。では、そのリアリティを超えていくためにいかなる表現がありうるのか。本作の達成を超え、〈いじめ〉表象の可能性はさらに追及されていかななくてはならないものである。

### 注

- (1) 『村上春樹全作品 1979～1989』⑤ 短篇集Ⅱ (講談社、一九九一年一月) に初出ののち、『沈黙 集団読書テキスト 第二期 B 一・二』(全国学校図書館協議会、一九九三年三月)、『レキシントンの幽霊』(文藝春秋、一九九六年一月、一九九九年一月文庫化)、『はじめての文学 村上春樹』(文藝春秋、二〇〇六年二月)に再録されており、単行本化および『はじめての文学』収録の際に加筆されている。本稿では著者が「大幅に手を入れた」と言及している『はじめての文学』版を底本とした。引用文中の傍線、中略、注はすべて筆者が施したものであり、底本より本文引用をする場合には引用文の末尾に括弧書きで頁数を示した。
- (2) 村上春樹「解題」『村上春樹全作品 1990～2000』② 短篇集Ⅱ (講談社、二〇〇三年三月、二六三頁)。

- (3) 村上春樹「かえるくんのいる場所」『はじめての文学 村上春樹』(文藝

春秋、二〇〇六年二月、二六六頁。

- (4) 長谷川達哉「羊たちの沈黙——村上春樹『沈黙』論」(宇佐美毅、千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』おうふう、二〇〇八年一月、二三四頁)。

- (5) 「いじめ」の語は現代日本において一般語として定着していると言つてよいものの、本論にて述べていくような構築性を前景化させる意図により、本稿では《いじめ》と山括弧を付す表記とした。

- (6) 岡田豊「村上春樹『沈黙』に関する一考察——大沢の《沈黙》／「僕」の《沈黙》——」(『駒澤國文』四三号、二〇〇六年二月、六三頁)。

- (7) 注6に同じ、六七頁。

- (8) 同様の論調は《しかし、大沢のタイトな人間関係は、大沢—青木間だけに留まるものだろうか。(中略) 大沢と言葉を交わす、同年代の少年たちは、中高一貫の進学校の生徒ということもあり、大沢の《無言の自負心》を青木同様《まわり》の同級生たちも敏感に感じ取っていたと考えられるのである。だとすれば、大沢のこの態度・心情に鑑みる限り、高

- 三時代のいじめの被害者としてのエピソードについても、大沢に全く問題が無かったとはいえないのではないか》(木村功「村上春樹『沈黙』論——学校と個人をめぐる『小説の現在』——」日本近代文学会関西支部編『村上春樹と小説の現在』和泉書院、二〇一一年三月、一五三—一五四頁)といった分析にも見出せよう。

- (9) このような《いじめ》把握については、北澤毅が《いじめられっ子に落ち度はない》という被害者の無垢性を主張する言説は強烈な規範性を帯びており、これを否定するような語りは公的言説空間からはほぼ排除されていると言つてよい》(『いじめ自殺』の社会学「いじめ問題」を

脱構築する』世界思想社、二〇一五年三月、二四四頁)と述べている通り、《いじめ》を語る際にはほとんどタブー視されているといえよう。

実際、内藤朝雄によって《たとえいじめの被害者に何らかの「からくりの理由」があつたとしても、被害者にいじめの「責任のもと」はない。

それは単なるいじめの正当化にすぎないのだ》(『いじめ加害者を厳罰にせよ』ベスト新書、二〇一二年一月、一六四—一六五頁)と説明されている通り、この種の被害者有責論は、少なくとも公的言説において認められるべきものではあり得ない。ただし、北澤は同時に、《いじめ》の現場においては《いじめは悪である》という規範命題を教科書的知識として知ることと、「いじめる」という実践をすることは別次元

(前掲書二四六頁)であることから、《いじめられる側にも責任がある》と多くの人間が考えているという調査結果を生徒たちに突きつけたうえで、そうした社会意識が根強く存在し続けるのはなぜかという問題を徹底的に考え(前掲書二四五頁)ることの重要性を提起している。本稿には、本作と《いじめ言説》に共通する特徴との差異を意識的に検討することを通し、そうした実践の一端を担おうとした側面もある。

- (10) 本文には《きつとその頃僕はひどい顔をしていたんだと思います。よく眠れないし、ノイローゼ気味になっていましたから》(二二—二二二頁)とある。

- (11) 本文には《あの半年に味わったことに比べれば、そこからあとに経験した苦境なんて、苦境のうちにも入らないようなものでした》(二二五頁)とある。

- (12) 岡田豊は《体験談を語っている現在においても松本との共通性に気づくどころか冷淡である》(注6に同じ、六四頁)と述べているほか、山田

- 夏樹も「松本」の自殺後、自身も学校で「地獄のような状況」に陥る体験をしているのにも拘らず、それを語る現在の「大沢さん」からは何ら「松本」を慮るような言葉は出てこない」（村上春樹「沈黙」における現在性——饒舌、「沈黙」の暴力『学苑』九二七号、二〇一八年一月、一六九—一七〇頁）ことを問題視している。加えて、大沢の姿勢を肯定的に見る論考でも（松本の自殺に際し、その心中への配慮を欠いた言動）（岡田康介「再話」される大沢／〈物語化〉する「僕」——村上春樹「沈黙」論——『横浜国大語研究』三巻二〇一四年三月、七九頁）、〈自分のことでせいっぱいで、他人のことなど思いやれなかった自分——例えば松本の苦痛を理解しようとしなかった自分〉（注4に同じ、二四六頁）等と、当の発言自体は決してプラスに評価されてはいない。
- (13) 伊藤茂樹『子どもの自殺』の社会学 「いじめ自殺」はどう語られてきたのか（第三章「いじめ自殺」のロジック）青土社、二〇一四年九月、一〇二—一〇三頁。
- (14) 「自殺」という行為一般に関する多くの著書をもつ高橋祥友も（私がここで言いたいのは、自殺は多くの要因からなる複雑な現象であって、自殺の心理を理解し、それを予防するには、たったひとつの方法だけで正面突破することはあまり得策ではないということです。（中略）このような考え方からすると、「いじめ→自殺」という短絡した解釈は、問題の本質を見失う危険があるように思えてなりません」（『自殺の心理学』講談社現代新書、一九九七年三月、六四—六五頁）と、〈いじめ〉と自殺の因果関係を自明視することの危険性に言及している。
- (15) 本稿にて参照したのは〈いじめ〉から自殺への因果関係が自明化するこ

当人の意識に及ぼす影響については山本雄二「言説的实践とアーティキュレーション——いじめ言説の編成を例に——」（『教育社会学研究』第五九集、一九九六年一〇月）に詳しい。山本は〈いじめ自殺〉の遺書を分析し、〈いじめ〉が「妥当な自殺の動機」として、自殺が「魅惑的な告発の手段」として被害者を惹きつけてしまっている面を問題視している。この問題については、北澤毅『いじめ自殺』の社会学 「いじめ問題」を脱構築する』（世界思想社、二〇一五年三月）や北澤毅、間山広朗・編『囚われのいじめ問題 未完の大津市中学生自殺事件』（岩波書店、二〇二一年九月）が批判的に論じている。

(16) こうした意義づけに近いものとして、木村功による（この意味で、松本の自殺に対する大沢の一見冷淡に見える態度は、大沢がいかに学校という教育システムに距離を置いていたかを物語ろうとするものとして読まれなければならない）（注8に同じ、一五七頁）との評価が挙げられる。ただし、木村が「大沢と松本の差異」に着目しているのに対し、本稿は「大沢と教師の差異」により焦点化している。

(17) 次のweb記事からは、本作に対する「相対主義的読解」への違和を表明するものとして示唆を受けた。「村上春樹の『沈黙』…なぜ人は物語を相対主義的に読解したがるのか？」

(<https://theigadary.hatenablog.com/entry/2020/02/15/14916>）  
二〇二〇年二月一五日掲載、二〇二〇年一月二三日閲覧

(18) 山田夏樹は（つまり、やはり再構成の語りの段階においては「おそらくは余計な質問」であったと「僕」自身認めているように、「ここでの質問は、ボクシングから即座に「喧嘩をして誰かを殴」ることを連想するという、ステレオタイプなものではない」と述べている（注12に同じ、

一六五頁)。

- (19) 西田谷洋は〈善悪を他人を隔れる意図があったか否か程度の意味で捉えた場合、青木と大沢の善悪の意図の有無と結果に帰結したか否かによって、物語は幾通りにも捉えられる。そしてそれを「僕」が大沢に対して批判的／共感的に語るか否かによって、物語の捉え方は倍化する。(中略) 大沢／「僕」が誠実に語ったとしても、嘘をついたことになるかもしれない可能性がどこまでもつきまとう。そうした現代的な嘘の物語として「沈黙」はある〉(「ポスト・トゥルースとフィクション——「象の消滅」「TVデビュー」「沈黙」『村上春樹のフィクション』ひつじ書房、二〇一七年二月、四八八―四八九頁)と述べ、本作のもつ真実の決定不可能性を的確に言語化している。

- (20) 山田夏樹は、青木の加害行為の実際を判定し難い状況にて「深み」といった語を操作し、具体的な説明なしに人間理解を行なう大沢を〈他者を一面的に評価し、安易にレッテルを貼り、そこで(注…特に優劣の)二元論を生み出していくようなあり方〉(注12に同じ、一六四―一六五頁)と批判的に捉えた上で、〈そのように互いに他者を見ないあり方、「僕」の質問に過剰に反応する「大沢さん」の饒舌と、結果的に「僕」が陥る「沈黙」という構図を通すことで、改めて読み手が自身に何を還元させ、世界をどのように捉えていくのかということ突きつけてくる点にこそ、本作の現在性があると言えるのである〉(同一七二頁)との評価に至っている。

- (21) 注13に同じ、九四―九六頁。

- (22) 注3に同じ。

付記：本稿は、日本文学協会第四〇回研究発表大会(二〇二二年七月四日、Zoom オンライン発表)での口頭発表に基づいている。発表に際して多くのご教示を下された方々に感謝を申し上げます。

(はた こうへい、広島大学大学院人間社会科学研究所博士課程後期在学)